2022 年 4 月 10 日
京都府立大学京都地域未来創造センター

2021 年度「場づくり Labo in 南山城～生業と地域～」開催報告

【なぜ、「場づくり」？】

場づくり Labo とは、京都府内の自治体職員、地域づくり実践者等を対象に、住民主体のまちづくりの現場を体感してもらい、ディスカッションを通じ「地域づくり」を問い直すプログラムです。

近年、地域づくりの文脈で、場づくりに関心が高まっています[1]。全国各地で、地域内外の人や組織のつながりを再構築し、人と組織の相互作用によって、地域らしさを再発見しながら新しい活動や価値を生み出し、課題解決につながるような活動が生まれています。センターでは、国内外の研究者やまちづくり実践者と連携して、2020 年度から住民主体のまちづくり人材の育成のプログラムづくりを進めてきました。

【なぜ、南山城村で、「生業」と村づくり？】

2021 年度は、宇治茶の生産地として知られ、高齢化・人口減少が進むなかで住民が住み続けるためのむらづくりで注目を集める南山城村を訪問しました。2017 年にオープンした村の地域商社としての役割を担う「道の駅みなみやましろ村」が、人や組織をつなぐ場として、どのような役割を果たし新しい動きを生み出しているのか、田山地区を実際に歩き、地域の基盤を支えるキーパーソンに話を伺いました。

当日は、「生業（なりわい）と村づくり」をテーマに、旧 田山小学校を会場に、参加者同士で交流を行い、村のお弁当をいただいた後、道の駅みなみやましろ村の運営を担う森本健次さん（(株）南山城代表取締役）の案内で、村の生業であるお茶と椎茸の生産現場や集落を歩きました。また、お茶を味わいながら、若手茶農家、デザイナーなど村の価値を発信する事業者や村役場職員から話を聞き、３つのグループに分かれて意見交換を行いました。

【ねらい】

①南山城村田山地区を歩いて、生業（茶業・しいたけ栽培等）を基盤にした集落の形や暮らしを知る
②地域のキーパーソンに事業をはじめたきっかけとこれからのビジョンを聞く
③地域づくりにおける場づくりと人づくりの相互作用についてヒントを得る
④立場によってものの見方が異なることを体感的に理解する

【キーワード】 住民主体／生業と地域／地域内資源循環／住み続けられる村づくり／つながりの再構築／関係人口／場づくりから始まる地域づくり

【日程】2022 年 3 月 10 日(木)　10 時 30 分～16 時
【場所】京都府相楽郡南山城村　旧　田山小学校（現：田山生涯学習センター）
2003 年に閉校、2006 年にものづくり施設（田山生涯学習センターは・ど・る）としてリノベーション

[1] 地域づくりおける場とは、必ずしも建造物の有無に捉われず、「人が集まり、相互作業を行う枠組みや空間」を言います。

【参加者】12 名

- 自治体職員 8 名
  （南山城村 2 名・相楽東部未来づくりセンター3 名・精華町 1 名・京田辺市 1 名・亀岡市 1 名）
- 地域づくり支援者 2 名（京都府協働コーディネーター・きょうと NPO センター他）
- 京都府立大学　大学院生（川勝ゼミ）2 名
- 京都地域未来創造センター教職員 5 名

【スケジュール】

10:30		旧　田山小学校（現田山生涯学習センター）　集合
10:40～11:30	**50**	**チェックイン・自己紹介・チームづくり**
11:30～12:00	30	昼食（むらのおかん弁当）
12:30～14:00	**90**	**①　田山地区のむらさんぽ** 案内役：森本健次さん（株）南山城　代表取締役 **【訪問先】** **・吉岡克弘さん(茶・椎茸生産者)**： お茶を中心とした村の生業を支える **・東山商店（地域を支える小売店）**： 高齢者への配達や送迎など地域に根差したサポートを実施 **・山﨑桃子さん(移住交流スペース「やまんなか」スタッフ)** ランチ会等移住希望者と地域を繋ぐ取り組みを実施
14:00～15:30	**90**	**②　４人の地域キーパーソンのトークセッション＆グループトーク** **「自分たちで村の価値をつくる～いままでとこれから～」** **・兜岩知也さん（兜デザイン）** 道の駅みなみやましろ村のトータルデザイナー **・中窪良太朗さん(U ターン茶生産者・中窪製茶園)** 南山城紅茶と家業の緑茶づくりを行い、催事やイベント、外販にも精力的に取り組むこれからの若手茶農家 **・岸田いずみさん(南山城村役場産業観光課　課長補佐)** 観光を切り口にした村づくりと村の住民が動き出す仕掛けづくり **進行役：森本健次さん**
15:30～16:00	**30**	**参加者同士の振り返り・共有**

【主催】　京都府立大学京都地域未来創造センター

【企画協力】　（株）南山城・京都府相楽郡南山城村役場
ポートランド州立大学公共サービス実践センター

＜当日の概要＞

【田山地区のむらさんぽ】

① 吉岡克弘さん(茶・椎茸生産者)

- 田山では昭和 30 年代にしいたけ栽培が始まった。冬の間の副業で、ビニールハウスでの原木しいたけを始めた。現在は十数軒のみが栽培し、うち数件が契約農家として組合と契約し、スーパーの平和堂で販売。
- 2 月頃に原木を切って 3 月頃に菌を手作業で植え、10 月～2 月頃まで収穫。

・ 原木しいたけは毎年、品質に波がある。「ええ時とわるい時がある」。
・ しいたけ栽培の大規模化は考えておらず、売れる範囲で栽培している。
・ 村の議員として、農業振興、産業創出にも関わってきた。

② 東山商店（田山地区で唯一の地域を支える小売店）:

創業約 80 年、両親の代から代を継いでいる。
地区で唯一の食料品店。生鮮食料、野菜も扱うよろず屋。
地区の人が話をするために立ち寄ることも多い。
夜でも頼まれてお店を開けることもある。大変だが、地区の人の顔が浮かび、なかなかやめられない。

③ 山﨑桃子さん(移住・交流スペース「やまんなか」スタッフ・移住定住推進員)：

- 2015 年に南山城村に移住。2018 年にやまんなか勤務（週 3 回)。道の駅でも働きながら、フリーマーケットを主催したり、こんにゃくづくりをしている。
- ネットで空き家を探して月ヶ瀬地区に夫婦で移住。パートナーは IT 関連の仕事を行う。
- 移住・交流スペース「やまんなか」

村役場産業観光課が所管。移住促進、村のファンづくり、村内外の情報発信を行う。
2016 年 4 月、移住定住推進員 2 名を配置。
2016 年 10 月、空き家バンクスタート
2017 年 5 月、やまんなかオープン（4 月に道の駅開設)。

- 当初は外から人を呼ぶことに力を入れていたが、2019 年ごろから村内へ情報発信し、村の人を呼ぶことに力を入れ始め、2021 年度は村内の来訪者の方が多かった。

【４人の地域キーパーソンとのトークセッション】
「自分たちで村の価値をつくる～いままでとこれから～」

森本健次さん（(株）南山城　代表取締役)

- 2010 年､役場職員として村づくりを担当していた。2000 年代初頭から、学校の統廃合、利活用の取組から村づくりに関わりだした。
- 南山城村といえば宇治茶が有名であるが、産地としては知られていない。生産者さんも市場に売るだけしか考えていなかった。問屋さんに目が向いていた。
- そこで､お茶に価値づけをし､「村の人がお茶の価値に気づいて、その利益を享受する仕組み、地域内で経済が循環するシステム」地域商社をつくるという方向性、自分たちが解決できる仕組みづくりに取り組みたいと思い始めた。
- 当時、地域活性化がさかんに言われていて、村長から「道の駅」の立ち上げを特命事項として取り組むことになった。2012 年に、前村長から道の駅の立ち上げを「お前がやれ！」と言われ、いろいろな人に会うためにいろんな場所に行った。
そんな時に出会ったのが高知県四万十町の道の駅「とおわ」を経営する(株)四万十ドラマ 社長畦地さんたち。四万十町は南山城村よりももっと過疎が進んでいて強い危機感を持って地域づく

りに取り組んでおり、その熱意を肌で感じた。４年にわたるノウハウ移転を受けた。特に、こだわったのが「デザイン」。兜岩さんに右腕としてかかわってもらっている。

・ 自社開発製品も強み（利益率が高い）。今では京都市内の無印良品店舗やナチュラルローソンにもオリジナル商品を置いてもらっている。生産者さんも少しずつ増えてきた。村のお母さんがつくるお弁当も人気で、おばあちゃんがサラダセットをつくりたいということを言うようになってきている。生きがい対策にもなっている。今までとは違うビジネスの形態をつくりだしている。

兜岩知也さん
（兜デザイン・グラフィックデザイナー・カメラマン）

・2011 年に実家である南山城村･高尾地区に U ターンして、デザイン事務所 兜デザインの拠点を村に移した。
・村のトータルデザインを担当している。
村の当時は道の駅の仕事以外もしていたが、森本社長に誘われ、退路を断つために他の仕事は断った。
道の駅の「村」のトータルデザインにはこだわった。五感で感じられるように。道の駅のロゴ作成は、企画のために昔のことをいろいろ調べたり、聞いたりしていたのだが、ある住民の方の蔵にあった文書の文字。着想を得て作成した。

中窪良太朗 さん（中窪製茶園５代目）

・ お茶農家の長男で５代目。U-ターン。父親の代で和紅茶を作り始めた。田山小学校の製茶工房がある。
・ 緑茶よりも紅茶のほうが手間がかかる。そもそも和紅茶を作り始めたのは和紅茶が花粉症に効くとブームになっていた時で 1993 年にべにふうきという品種を開発して登録した。
・ いままで茶農家の情報交換の場もなったが、紅茶をつくるようになって栽培の克服方法とか関西の茶農家との交流も増えて、茶業に関わるひとたちでの情報共有もするようになって外との交流が増えた。
・ 森本社長がいるので安心して新しいことにチャレンジできる。

岸田いずみさん（産業観光課　課長補佐）

- 2017 年の「移住・交流拠点　やまんなか」の立ち上げ、移住促進を担当。それより前から、別の部署でも村づくりに関わっている。
- 当時は、村にはなにもないという印象だった。
- 「やまんなか」は前村長が所有していた古民家をリノベーションした。移住支援員 2 名が常駐している（週 3 回開設）。
- 「村を見せる」拠点になっていて、当初は、訪問者は村外の方が多かったが、いまでは村内の方が 6 割を占める。閉鎖的な田舎を変えてきている。
- 当初、不動産屋さんも家が売れないと思っていたが、生き方や暮らし方、村や地域の魅力を入口に村に関心を持ってもらいたくて、空き家バンクを作った。
- 観光という切り口というよりは、人としての入り口を想定している。
- 知る→買い物をする→来る→住むというサイクルをつくろうとしている。
- 新しく立ち上げたソーシャルビジネスである「むらびとラベル」のターゲットが、濃い層、自然や歴史、いとなみに触れる層。誰もがそこに興味を持つわけではない。行政はもう少しライト層を狙っている。
- 森本社長が「露出狂」のため、メディアには頻繁に取り上げてもらっている。先日もテレビ東京の番組「いなかで暮らそうよ」で取り上げてもらった。
- 村の生産者さんの関心は、いままでは加工だけだったが売ることにも関心が向きだしたと思う。

【森本氏】

- 道の駅から開設から 5 年が経過してステークホルダーが見えだした。道の駅というプラットフォームができてプレイヤーがみえだした。
- これからは第二ラウンド。道の駅開設時はいろいろと言われたが、村役場や NPO とも違う中間のプレイヤーとして、経営者としても、村づくりと両立させてやっていかなくてはいけない。
- 現在、ゆるやかなかたちで、村づくりを担う 7 つの会社を立ち上げて、それぞれのＩターン、Ｕターンのプレイヤーに社長になってもらい、村づくりを進めている。

【参加者の感想】（抜粋）

- 行政が考える課題・政策と、現場の声を聴いたうえでの課題・求められる政策を考えるときに生じる差異・違和感を解消できるように努めたいと感じました（自治体職員）。
- 小さな成功体験を積み上げていくことや、足元にあっても気づきにくいものを、外ばかりに求めるのではなく掘り下げていくことの重要性を感じました（自治体職員）。
- 外部からの協力の得方が上手だなと思いました。よく、外部の団体が住民の話し合いのファシリテートなどして目立ってしまうことがありますが、南山城ではそうしたことも森本さんをはじめとする地元の人が引き受けていたことが、根づいて行った要因だと思いました（自治体職員以外）。
- 地域を魅せるための「デザイン」の視点の重要性を感じました（自治体職員以外）。

【田山地区の概要】（後日、センターで加筆）

- 南山城村は京都、奈良、三重、滋賀の県境。生活圏としては伊賀や奈良である
- 地区としては 6 つに分かれる（北大河原地区、南大河原地区、童仙房地区、野殿地区、高尾地区、田山地区）。
- 田山地区人口：528 人（H27 国勢調査）、15 歳未満人口 50 人、65 歳以上人口 234 人（高齢化率 39%）、（南山城村の高齢化率　41%）
- **生業**
- 盆地であり土地がやせていた。平地が少ない。戦前まで養蚕が盛ん、かつては米作りを主業とする傍らで冬には養蚕を行い、冬には余った燃料用の薪を売って生計を立てていた。戦後、昭和 20 年代にお茶の生産が始まり茶業に切り替えて養蚕は衰退。
- 戦前から戦中には亜炭（あたん）の採掘も盛んで、井戸の採掘や貨物列車用の新たな駅（月ヶ瀬口駅）が作られた。朝鮮半島からも働きに来ていた。
- 昭和 30～40 年代に、氾濫を繰り返した名張川に高山ダムの建設。大型機械が田谷地区に入り、休日に機械を動かして山を切り開いていった。ダム建設による土地整備と行政による茶業の推進もあり茶業に従事する人が増えた。
- 生業－田山では昭和 30 年代にしいたけ栽培が始まった。燃料の変化によって茶葉を乾かす燃料に炭や薪の必要がなくなり、山の木々の利用が減少した。同時に農閑期の仕事であった炭焼きも不要となったため、冬の副業でビニールハウスでの原木しいたけを始めた。燃料として使われなくなった木を、新たな商品作物である椎茸栽培に利用している。水田・しいたけ栽培と組み合わせられた茶産地となっている。
- 縦畝の景観（茶の畝が等高線に沿って配置されるのではなく、斜面を駆け上がるように配置）。縦畝にすると日光が均等にあたるため。ただ縦畝の場合は、摘彩機を使うのが大変であり、横畝の畑も増えている。
- 祭礼－諏訪神社の「花踊り」（京都府無形民俗文化財）。雨ごいの儀礼。江戸時代は徳川家柳生藩の統治下で花踊りにもその影響がみられる。大正時代に途絶えたが、S38 年に保存会や青年団で復活し、地区のよりどころ、紐帯となっている。

【参考文献】

- 京都府立大学上杉和央研究室『南山城村田山地区調査報告書』（2017）
- 「行政より公益を担う株式会社をつくる」（2018 年度龍谷大学大学院地域公共人材総合研究プログラム 公開講演会　森本健次さん講演録）
- 「「村で暮らし続ける」を支える地域商社としての道の駅」（政策シンクタンクＰＨＰ総研「企業は社会の公器」シンポジウム資料（2017 年度）